

2018年度 iEARN 国際会議報告 —iEARNアメリカ国際会議の内容と意義—

THE REPORT OF 2018 iEARN CONFERENCE
—The Contents and Meaning of The Conference in U.S.A 2018—

清水 和久 (人間科学部こども学科教授)

Kazuhisa SHIMIZU (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

iEARN国際会議は、毎年開催され、世界中から多くの教育者を集めている。iEARNの組織の成り立ちはアメリカとソ連の冷戦時代にお互いを知らないことからくる疑心暗鬼から戦争に発展することを防ぎたいという思いから始まっている。次世代を担う若者同士がもっと交流できるプログラムが必要であると考えられるようになった。iEARNでは様々な国際プロジェクトがあり、今回は時にSDGs (Sustainable development goals) を共通の課題として取り組んでいる姿勢が明確になっていた。

本論文では今回のアメリカの会議において、筆者が参加した分科会を中心に報告するとともに、その他のiEARNのプロジェクトの内容もあわせて比較した。結果、共通の教材があり、その教材をもとに交流が促進できるものがあること、WEB会議などで話し合いができる機会があること、そして成果物が可視化されるものがプロジェクトとして活性化していることがわかった。

〈キーワード〉

国際協働学習, 国際会議, iEARN, JERAN

1 はじめに

2018年7月8日から13日まで、iEARN第30周年記念国際会議及びユース会議がU.S.Aのバージニア州のウインチェスター市のJohn Handley high schoolを会場にして開催された。このiEARN (International Education and Resource Network) の国際会議は日本では2003年に淡路島で開催されている。それ以来筆者は、今回を入れて8回この国際会議に参加している。今年度の6月からはiEARNのJAPANセンターであるNPO法人JEARN (日本名グローバルプロジェクト推進機構) の理事長の役を引き受けることもあり、日本での国際教育の展開も視野に入れて参加することとした。本論文では筆者の参加した分科会を中心に内容を紹介し、各分科会で紹介されたプロジェクトの比較分析を行う。

2 iEARNについて

2-1 はじまり

アメリカのPeter Copen氏が、アメリカとソ連が冷戦下で、相互の国民が不信感を抱いている事実を嘆き、互

いが分かり合えるために若者同士をつなごうと、Copen Family Foundationを1988年に設立し、モスクワとニューヨーク州の12校ずつの学校をつないだプロジェクトをスタートさせたのが始まりである。両者の学校間では、社会的政治的な問題について討論がなされたり、互いの国の著名な作家の本を読み合ったりなど異文化理解が進んだ。⁽¹⁾

今年のiEARNの大会は1988年の設立から数えると30年目であり30周年記念大会という呼称がつけられた。初日の全体会で、このiEARNの創設者Peter Copenが登壇し、ユースから質問を受けて答えるという形で当時の様子を語っていた。

財団の設立当時はお金もなく、人を雇うこともままならなかったようである。しかし1994年に、iEARNの第1回の年次国際会議がアルゼンチンで開かれ、それ以来、年次大会自体は、昨年のモロッコ大会で第23回を数えるまでになった。iEARNは、草の根レベルで教育者同士、またそのクラスの児童、生徒を結び付け、英語をツールと使うことで、お互いの国の文化を理解するとともに、協働で学習を

進めることで、国境を越えた協働作業の素晴らしさを体験できる機会となっている。

2-2 iEARN アメリカ年次大会の概要



図1 第30回 iEARN 国際会議会場校の高校の正門の前

2018年の年次国際会議は、中高生が参加するユースサミットとともにアメリカのウインチェスター市で、7月8日から7月13日まで開催された。今年で組織の設立から30年目になり、30周年記念大会として開催された。50カ国から、約400名の教育者と中高生が参加。5日間（4日間の分科会+1日間の観光）開催期間で、全体会でのKey note speechが9本、分科会（ワークショップも含む）が85本、ユースサミットで50のセッションが実施された。分科会のプレゼンターは、日ごろオンラインでiEARNプロジェクトを行っている教育者が、アメリカの会議に参加し、合同で発表する機会が多かった。分科会も視聴者参加型で、聞きに来た人と対話しながらの会が進んだ。本報告では、筆者が参加した会で発表された分科会から8本選んでiEARNで公開されているwebも参考に紹介する。番号がついているものが筆者の参加した分科会などである。

表1 大会スケジュール

	午前1	午前2	午後1	午後2	午後3
9日	開会式	全大会	分科会 5本	分科会 8本①	ポスター
10日	全大会 2本	分科会 6本	分科会 8本②	分科会 8本③	分科会 8本④
11日	観光ツアー				
12日	全体会	分科会 7本⑤	分科会 7本⑥	分科会 7本⑦	Culture night
13日	分科会 7本⑧	分科会 7本⑨	分科会 7本⑩	全体会	閉会式

○の番号：筆者が参加した分科会である。以下それぞれの内容について紹介する。

表2 筆者の参加した分科会のテーマ

- ① MACHINTO: HIROSHIMA FOR PEACE
- ② TOUCHABLE EARTH
- ③ CREATING AND SUSTAINING GLOBAL PARTNERSHIPS: HOW TO MAKE FRIEND AND INFULENCE SDGS
- ④ SPREDING THE ROOTS OF INDIAN ART: A HANDS-ON ART WORKSHOP ON AN INDEIAN FOLK ART FORM
- ⑤ HANDS ON PEACE: AN INTERCULTURAL EXPERIENCE, BRAZIL-JAPAN
- ⑥ PROFESSIONAL LEARNING THROUGH ACTION RESEARCH
- ⑦ MY WORLD 360: EMPOWERING THE NEXT GENERATION OF SDG JOURNALISTS
- ⑧ iEARN GIRL RISING PROJECT
- ⑨ LET'S THINK ABOUT EDUCATION FROM CLASSROOM STYLE (YOUTH SUMMIT)
- ⑩ FOLK AND CULTURE PROJECT

3 各分科会の概要（筆者参加の分科会）

ここでは筆者が参加した分科会①から⑩についての概要を紹介する。

3-1 MACHINTO: HIROSHIMA FOR PEACE

発表者：Yoko Takagi（日本）、Arlene（プエルトリコ）、Catherine（アルゼンチン）、Sandra（パラグアイ）

日本人の高木洋子氏が始めたプロジェクトで、広島市の被爆の様子を描いた絵本「まちんと」（松谷みよこ作）の絵本を共通の教材として、戦争について感じたことを絵本やビデオにし、共有するプロジェクトである。

まず、高木氏が広島や長崎でたった1発の原爆が多くの人を奪い、生存者も放射能によって苦しんだことを話したあと、現在世界が保有する核兵器で地球が6回全滅することを伝えた。そのあとで「まちんと」の絵本を朗読し、現在でも平和を願う「まちんとバード」がシリアや紛争が起こっている地域で平和を訴える必要があることを訴えた。この絵本は英語版とスペイン語版があり、プロジェクト参加者には無料で配布され、各国で学習したのち、iEARNのフォーラムで交流することになっている。

フォーラムの教材には、広島や長崎の被爆時と現在の様子を比較できる動画が掲載されており、参加者は原爆の恐ろしさを知ることができる。また、参加した児童生徒が作成した絵本などもPDFで見ることができる。当時の悲惨さを学習するだけでなく現在紛争が起こっている地域の学習や、過去の自国の戦争についても学習を深めることができるプロジェクトである。

戦争経験者でもある高木氏自身が教材となってプロジェクト参加校とweb会議を行い、話題も提供している。

2018年度は、アルゼンチン、スペイン、メキシコ、プエルトリコの4か国でこのプロジェクトを行っており、web会議の記録もフォーラムから見る事ができる。

3-2 TOUCHABLE EARTH

発表者：Tudor Clee (ニュージーランド)、他1人

発表者が世界中を旅行して、こども目線で撮りためた動画を見られる。訪問先の子どもが、自分たちの自己紹介や、家族、学校、遊びなども含めて自分自身を紹介するスタイルの動画となっている。これはSDGsの4番目の目標（質の高い教育の保障）の7番「2030年までに持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル・（中略）・グローバルシチズンシップ・（中略）・必要な知識と及び技能を習得できるようにする」につながる。現在はネパール、インド、中国、ルーマニア、イラク、南アフリカなど6か国の動画があり、iPadなどのアプリとして発売されている。2014年にBest App for Children and Toddlersにノミネートされるほど、子どもにとっては外国のことを学びやすいアプリになっている。このアプリは分科会で、紹介があった。しかし、現在日本からはこのアプリを入手はできない設定になっている。

3-3 CREATING AND SUSTAINING GLOBAL PARTNERSHIPS: HOW TO MAKE FRIEND AND INFULENCE SDGS

発表者：Fay Stump (USA) (他2人)

聴衆参加型のワークショップ、SDGsの目標を達成するためには、教師個人の力だけでは不十分であり、国を超えた協働学習の実行が有益であることを、参加者に考えてもらおうと共に、その具体的な成功例としてプロジェクト実践者の実践例を紹介した。

3-4 SPREDING THE ROOTS OF INDIAN ART: A HANDS-ON ART WORKSHOP ON AN INDEIAN FOLK ART FORM

発表者：Kalyani Voleti (インド)

インドのMaharashtra州に住む先住民族のWarli tribalの伝統的なデザインについて学び体験するワークショップ。デザインは非常に基本的な図形（三角形、四角形、円）から構成されており、人間の体は先端がつながった三角形で表され、体を単純化しアニメ化することで、多彩な表現が可能になっている。参加者は基本的な図形をもとにオリジナルのデザインを描画した。

3-5 HANDS ON PEACE: AN INTERCULTURAL EXPERIENCE, BRAZIL-JAPAN

発表者：Alimerinda (ブラジル) 滝沢真由美 (日本)

このプロジェクトは9月から11月までの3か月間で行われ、以下の手順で実行される。

9月 平和を作り出した「ピースメーカー」について調査教

師も生徒もどのように平和に貢献できるか考える

10月 平和のパネルの作成

このデザインの中に自分たちの手の形を書き入れ、平和の象徴であるハトなどを描画する。

11月 パネルを参加国に郵送し、自国に送られてきたものを平和の日を決めて展示する。

このプロジェクトは3か月間と現実的であり取り組みやすい。また作品を送りあうので協働学習を意識しやすい。

発表者の滝沢氏は日本の小中学校の英語のクラブの支援者として参加、東京オリンピックが2020年に開催されることから、2016年の開催地であるブラジルと平和の祭典であるオリンピックでつながることでこのプロジェクトを実施したことを発表した。滝沢氏は、今後東京オリンピックを契機に新しいプロジェクトを立ち上げ、オリンピックについての学習なども含めたプロジェクトにしたいと語っていた。そのあとブラジルからの実践紹介もあった。

最後に各国からの参加者に、平和を表すジェスチャーについて尋ね、両手を合わせた合唱のポーズ、胸の前で手のひらを90度回転させて組むポーズ、片手でピースサインなど、国によって違う様々サインが紹介された。「平和」を表すジェスチャーもいろいろあることがわかって興味深かった。

3-6 PROFESSIONAL LEARNING THROUGH ACTION RESEARCH

発表者：Margaret Riel (アメリカ) 他4人

iEARN のプロジェクトに参加する教師は、自分自身の実践について評価し、価値づけることは十分なされていない。他者にプロジェクトの成果を伝えるときに、児童生徒の変容について明確にわかれば参加者が増えると思われる。

この足りない部分を補うのがアクションリサーチの考え方である。一般的にアクションリサーチとは「教師が自己成長のために行う行動を計画して実施し、行動の結果を観察して、その結果に基づいて内省する」ということである。このセッションでは以下の流れで説明されていた。

- 1) アクションリサーチの方法を理解すること
- 2) アクションリサーチを実施している実践者から学ぶ
- 3) ラーニングサークルへの参加方法

ここでいうラーニングサークルというのはiEARNのプロジェクトの1つで、4、5校が1つのグループとなって質問を投げかけ、同時に他者からの質問に答えるというものである。参加校は同じ質問を自分以外の4校にでき、他の4校からの別々の質問に答える義務がある。

このラーニングサークルは自分が質問し、それに答えてもらうことになるので、より具体的な答えやすい質問を精査して尋ねる必要がある。

3-7 MY WORLD 360° : EMPOWERING THE NEXT GENERATION OF SDG JOURNALISTS

発表者：Lisa Jobson (アメリカ) 他1名

My world 360°は自分の周りの風景を写真で撮り、自動的に合成して360度の写真を作り出すアプリである。このアプリを使うことにより、その場で見上げたり、真下を向いたりしたときに見える映像も併せて1枚の写真に表現できる。教育現場でこのアプリを使って児童生徒に表現力を付ける取り組みをしているのがDigital Promiseと呼ばれる団体である。本ワークショップでは、会場校の学校を舞台に撮影を行った。今後、自己表現のツールとして臨場感のある映像を制作できるようになると思われる。

3-8 iEARN GIRL RISING PROJECT

発表者：Allen Written (USA), 関根真理 (日本) 他2人

2017年度にこのプロジェクトに参加した国は、日本、モロッコ、イスラエル、ウガンダ、インド、ジョージア、アメリカであった。このプロジェクトは、開発途上国の女子が、男子に比べ十分な教育を受けられないことが多いことを様々な事例を通して理解し、女子が自立して生きられる社会を作るために必要なことを考えていくプロジェクトである。このプロジェクトには本格的な動画教材が準備されている。通常は有料であるがiEARNのプロジェクト参加者は無料で視聴できる。筆者もこの動画教材²⁾を視聴した。開発途上国の8人の実在する女子にスポットライトをあてて再現フィルムとしてさまざまな因習などで教育を受けられない状況や、それを打破し、教育を受け変わっていくさまが表現されている。

その1つに、貧しい家庭の女子が幼いうちから児童労働に従事させられるネパールの“kamulari”制度の事例がある。主人公であるSUMAは、兄が学校に行ったのに対して、女子という理由で幼い時に奉公に出され、学校に行くこともできず、奉公先でひたすらその家の家事を行う。16歳の時に夜学に通うことを許され、その後ソーシャルワーカーの協力でこの制度が違法であることを訴え、ついにSUMAは自由の身となる話である。そのあともSUMAは児童労働で学校にいけない他の女子の家の前に立って、この制度の下で感じた気持ちを歌詞にして歌うことで、奴隷奉公で児童労働をなくそうとする活動する。動画自体は複数の国の字幕を選ぶことができ汎用性がある。(日本語は未対応)

このプロジェクト参加者はこのような動画教材を見て実態を学習し、自分たちのできることを考えていくことができるプロジェクトである。

女子が教育を受けられないということはその子どもにも満足な教育ができないということであり、その子どもが女子の場合には、負の連鎖が続くことになってしまう。母親が教育を受けていれば養育の中でその教育の内容が子ども

にも伝わり、教育内容が伝授されることになる。

分科会では、関根真理氏(啓明学園中学校高等学校)からの取り組み紹介(日本からのSkype)があった。その内容は、高校3年「国際理解」の生徒35名がこのプロジェクトに参加し、視聴後、アメリカの高校生とその内容について話しあった後、両国の男女差別、児童労働の有無、格差及び高校生活について紹介したというものであった。2学期はイスラエルやモロッコの高校生とともに別の動画教材を視聴し、意見交換をしたのち、動画のプレゼンを作り学びを共有した。この関根氏の実践はJEARN(iEARNの日本センター)のwebsiteの「活動報告2017」³⁾に記載されている。

分科会の後半では、プロジェクトに参加したジョージアの高校生が発表し、この動画教材を通して世界中の高校生が児童労働について考え、意見を交換する中で、地球市民として相互のつながりを生み出すきっかけとなった主旨の報告があった。教育を受けることの大切さ、その機会を保障する重要性を訴えた。

3-9 LET'S THINK ABOUT EDUCATION FROM CLASSROOM STYLE (YOUTH SUMMIT)

発表者：沖縄の尚学館高校2年生 4名(日本)

この分科会はユースを対象としたものであり、沖縄の尚学館高校の発表テーマは、国別の教室環境の発表であった。日本の教室の机の配置は、一斉教授型に対応した全員教師のほうを向いて座る座席配列が多いのに対して、イギリスは、机を合わせて小グループで座る話し合い重視の座席配置、フランスは全体での討論がしやすい口の字型の座席配置が多いことを紹介し、分科会に参加した高校生の自国での座席配置を尋ね、その理由も話し合っていた。

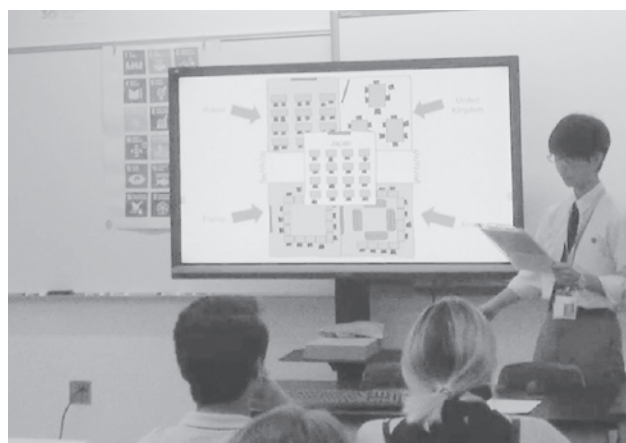


図2 沖縄尚学館高校2年生のプレゼン

ユースを対象とした発表であるため、各国の学校事情を直接聞ける機会としては貴重である。高校生自身が反応を得られる貴重な機会である。

3-10 FOLK AND CULTURE PROJECT

発表者：Ayana Tanaka (日本) 他1名

このプロジェクトは、過疎化が進み地域の祭りの担い手が減っていく中で、なくなりつつある伝承芸能や民話やダンスなどを発掘し、その継承を図る取り組みを行うものである。発表者は、過去に大学生の時に日本で行われたユースサミットに参加し、世界中から集まったユースと交流することで、各国の伝統文化を紹介する姿勢と英語の重要性について学び、このプロジェクトの支援を行っているとのことであった。日本の発表内容は継承者の減少で継続が難しくなっている「六甲丹生歌舞伎」についての中学校での授業実践の報告であった。分科会では各国の消滅しつつ伝承芸能にどのようなものがあるか、その存続に学校教育がどのように関与できるかなどを話し合った。

今後このプロジェクトの参加者を募り、各国の伝承芸能についてその存続の方法も含めてアイデアを共有していきたいとのことであった。

4 その他のプロジェクト

昨年 iEARN モロッコ大会で分科会発表があった2つのプロジェクト（大正琴プロジェクトと NDYS プロジェクト）についても言及する。この2つのプロジェクトは単独の合同大会として7月中旬に日本で「琴リピック2018 in 新潟」として開催され、筆者もゼミの学生と主に参加する機会を得た。iEARN のプロジェクトの比較の候補としてここで言及する。

4-1 大正琴プロジェクト

ファシリテータ：廣田元子 (日本)

このプロジェクトは、日本の大正琴を世界に配布し、演奏してもらおうとするプロジェクトであり、2010年から「iEARN 大正琴プロジェクト」としては廣田氏が主催している。廣田氏は、音楽の教員であり、小学校の音楽の授業に大正琴を組み込んだ授業を実施。2010年の iEARN カナダ大会からはワークショップで、参加した学校に大正琴を送り、演奏者を増やしてきた。2014年には新潟で開催された「琴リピック」に基調講演者として招かれている。

日本発信のプロジェクトとして、大正琴を参加校に寄贈し、合同演奏会を開催、音楽を通して世界平和を願うプロジェクトでもある。2018年に新潟で開催された大会では、8か国から参加があり、大正琴で「ふるさと」の合同演奏や各国で練習してきた独自の演奏が披露された。

4-2 NDYS プロジェクト

ファシリテータ：納谷淑恵、岡本和子 (日本)

NDYS (Natural disaster youth summit)：世界防災ことも会議は、阪神淡路大震災の10年後、2005年1月第2回国連防災閣議会議の開催を期に世界15か国、1000人の子どもの交流からスタート。気候変動などによって起こされる自

然災害などに対し、自分たちでできることとして、災害安全マップの制作、過去の自然災害学んだ教訓や等のプレゼンなどを通して児童生徒が、行動を行い地球市民として知識を共有し、成長することを目指している。2018年には琴リピックと共催でNDYSの会合も行われ、各国から集まったユースが3つのグループに分かれて、問題意識を共有しポスターにまとめた。(図3)

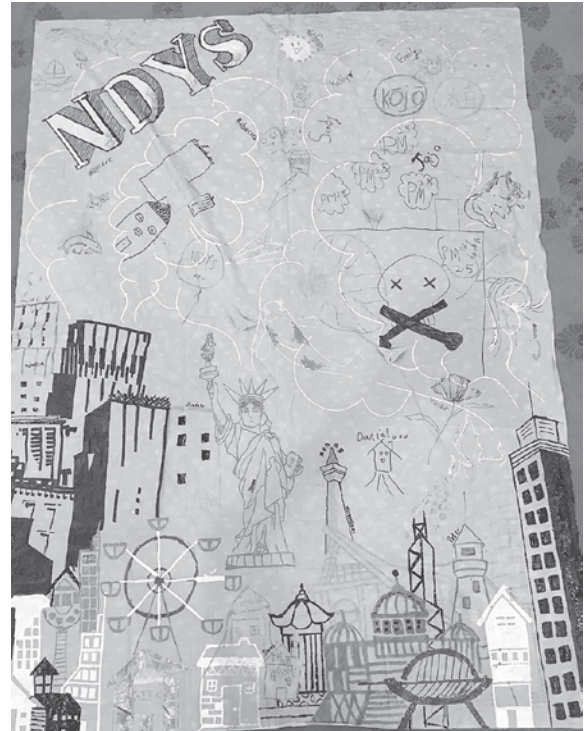


図3 NDYS 大気汚染への注意を促すポスターの1つ

Welcome to Organic world.

NDYS Declaration

The world will be a better place to live in if we, as students take full responsibility now.

So, We have mainly 3 opinions about water, tree and atmosphere.

First, Many people can't get safety water in the world. We need it because of our health and grow crops. But, water pollution and water shortage are increasing now. So, we should live without wasting it.

Next, We should protect tree for our future. The role of Tree is to clean air and to do rich ecosystem and water resource. So, Let's plant tree and stop overcutting of forest.

Finally, We must try to stop Atmospheric pollution. PM2.5 and Exhaust gas harm people and animals. So, It's important to understand the awareness of the risks of atmospheric pollutions.

Therefore, We are the fighters for environmental protection. Let's break through and road to our organic world.

NDYS 宣言文 (和訳)

つながりのある世界へようこそ

宣言

私たちがこれからの未来のために、十分な責任をもし果たすことができれば、世界はより良い場所になるでしょう。

そのために、水と木と大気にかかる三つの重要な提案をします。

まず初めに、世界ではほとんどの人たちが安全な水を使うことができません。私たちの健康のため、また作物を育てるためには水が必要です。しかし、今現在水質汚染と水不足が進行しつつあります。それゆえ、水を汚さず大切に使うライフスタイルを確立することが必要です。

次に、私たちや私たちの子孫のために森林資源を守るべきです。森林には、空気をきれいにするのと生態系や水資源を豊かにする役割があります。それゆえ、森林を乱伐せず、緑を増やす取り組みを促進していきましょう。

最後に、私たちは大気汚染を止めるようにしなければなりません。PM 2.5 や排気ガスは人々や動物を害します。それゆえ、大気汚染の危険性に気づくことが重要です。無駄にエネルギーを使用せず、地球にやさしい行動を心掛けましょう。

以上のことから、私たちは環境を守るための戦士となり、現状を超えて、つながりのある世界へ出発しましょう。

図4 2018 NDYS宣言文 in 新潟

これらのポスターからユースの宣言文の取りまとめを筆者のゼミの3年生が行った。いずれもSDGsにかかわる大気汚染、森林伐採、水質汚染を防ぐ宣言となった。

5 考察

このようにiEARNにはさまざまなプロジェクトが存在し動いている。次に、これまでに言及した7つのプロジェクトについて比較検討する。

表3 iEARNのプロジェクトの比較

プロジェクト名	共通教材	活動内容	成果物
①Hiroshima for peace	原爆に関する動画 絵本「まちんと」	核兵器の学習 平和について考える WEBビデオ会議	平和に関する絵本 ビデオ
⑤Hand for peace	過去の平和に関するポスター	作品、ポスター WEBビデオ会議	参加者の手形を 描画した平和に 関するポスター
⑥Learning circle	特になし アクションリサーチ の方法(教師)	5,6校でグループ 化し、質問事項を 尋ね、答える活動 WEBビデオ会議	調査結果の文章 及びプレゼン
⑧Girl rising	Girl rising DVD (開発途上国8人の 少女の話の動画)	動画を見て、感想 を話し合い、プレゼン の実施、行動の 考察 WEBビデオ会議	児童労働にまつ わるレポート、 動画
⑩Folk and culture	特になし	自国の伝承芸能の 調査、活性化策、行 動WEBビデオ会 議	調査した伝承芸 能のプレゼン
大正琴	大正琴	演奏練習と演奏大 会に参加 WEBビデオ会議 で演奏	大正琴を使った 演奏をマスター する
NDYS	災害マップ 災害の動画など	気候変動による災 害についての調査 対処法 WEBビデオ会議	災害マップ プレゼン ユースサミット 宣言文

1) 共通教材の利点

7つのうち共通の学習教材があるプロジェクトは、①と⑧である。共通の教材があるとその教材をもとに学習した後、感想などについて他国と話し合いがしやすい。特に⑧のGirl risingの動画教材の女兒の教育権については開発途上国共通の問題となっており、取り組みがしやすい。

2) 複数校のプロジェクトの利点

7つのプロジェクトはすべて、複数の学校で交流ができるものであり、1対1の交流だと相手が能動的でない場合は、交流そのものが成り立たない場合がある、その場合でも、もしwebにプロジェクトの過去の成果物の蓄積があ

れば、過去にさかのぼって自分の調査内容とも比較できる利点がある。

3) WEBビデオ会議の利点

どのプロジェクトもWEBビデオ会議が実施され、共同学習の意識を付けることができる。実際に顔を見ての話し合いは親近感が持て、地球市民という意識を持つことにつながる。

4) 英語のツールとしての重要性の認識と有用感

意見交換のツールとしての英語は重要であり、学んだ英語で、プロジェクトを進行させる経験は、英語の有用感を味わう上において重要である。

6 まとめ

以上から昨年のiEARNのモロッコ大会に引き続きiEARNのアメリカ大会や、その他の大会で筆者が参加した分科会からわかるプロジェクトの内容について言及してきた。

世界の教育は国連が定めた2030年までに解決したい課題あるSDGsに向かって動いていることがわかった。

プロジェクトを確実に実行するには、良い教材となるものが必要であり、今回の調査ではGirl risingのプロジェクトは秀逸であった。

これらのiEARNのプロジェクトを日本の学校教育に取り入れていくことが必要であると改めて思った。外国からきている高校生は、全大会や分科会で堂々と自分の意見を英語で話し、その会の話し合いの参加構成員となる姿勢が随所にみられた。このような高校生を生み出すプロジェクトが日本にももっと必要だと感じた。

今回Girl risingに参加している啓明学園の取り組みはすばらしく、国際教育がまさにコンテンツであり、それを学ぶためのツールとして英語が活用されているように感じた。また今回の会に参加している沖縄尚学館の上野先生が引率してきた8人の中高生もすばらしく、たくさんの外国の中高生と交流を行っていた。また食堂でほかの参加者が散らかした食器を片づけたりするなど日本の高校生の作法がすばらしいとの評価も受けた。同じ日本人として大変うれしかった。このような場に日本の生徒や学生を多く参加させたいと改めて感じた。

注

- (1) 清水和久 2017年度iEARN国際会議報告 金沢星稜大学 人間科学研究 第11巻 第1号 平成29年9月
- (2) Girl rising 動画サイト
<https://padlet.com/awitten/v6hjvt5e4d8n>
- (3) 関根真理 2017年度 国際協働学習iEARN レポート issn 2434-0049 pp.13-14
http://www.jearn.jp/japan/iearn-report/ISSN24340049_2017.pdf